

Christopher Sly はどこへ消えたのか

— *The Taming of the Shrew* と近代初期英国における放浪との関連性について —

滝 川 睦

I

Shakespeare の *The Taming of the Shrew* (1592-94 年頃初演、以下 *Shr.* と略す) と、これを下敷きにして再構成されたと考えられている *The Taming of a Shrew* (1594 年頃初演) の最大の相違点のひとつは、後者の結末が、「夢」から Slie が覚醒することによってもたらされるのに対して、*Shr.* の大団円には Induction に登場した鑄掛屋 Christopher Sly が再登場しないことである。

SLIE. I know now how to tame a shrew,
I dreamt upon it all this night till now,
And thou hast wakt me out of the best dreame
That ever I had in my life, but Ile to my
Wife presently and tame her too
And if she anger me. (*The Taming of a Shrew* 19.15-20)

Shr. の結末においては、夢で学んだ女性の操縦法を家に帰って実践しようと目論む Slie に相当する Sly が跡形もなく消えてしまうと同時に、Induction と対になって枠物語を構成するはずのエピローグも欠落してしまっているのである。とくに、*Shr.* の Induction 冒頭で Sly が口にする台詞——“Go by, Saint Jeronimy”(Induc. 1.7)¹⁾——が Thomas Kyd の *The Spanish Tragedy* (1582-92 年頃制作) における Hieronimo の台詞——“Hieronimo, beware: go by, go by”(3.12.31)——のパロディーになっていることを考慮するならば (Thompson 46)、*Shr.* 結末における鑄掛屋の失踪は大きな謎を投げかけていると言わざるをえない。なぜならば *The Spanish Tragedy* こそ、*The Taming of a Shrew* と同様な形で、芝居の劈頭と結末を飾る枠物語——Kyd の芝居の場合はコーラス役の Ghost of Andrea と Revenge が登場するプロローグ部分 (一幕一場) とエピローグ部分 (四幕五場) ——が厳然と配置された劇だからである。Lynda E. Boose が的確に表現しているように、*Shr.* の Induction は「枠物語の断片」(the broken part of an enclosing frame) であり、「もともとあった結末部」(the original conclusion) が欠落してしまっている印象を与えているのである (208)。では一体 Christopher Sly はどこに消えたのか。本論のねらいは、近代初期英国における放浪の概念を批評の視座に据

えて、この Sly 消失の謎を解明することである。

II

Boose は唯物主義フェミニズムの視点から、論文 “*The Taming of the Shrew, Good Husbandry, and Enclosure*” において、Sly の出自に加え、彼が登場する Induction と「じゃじゃ馬馴らし」を主題にしたメイン・プロットとの関連性について考察している。彼女の指摘によれば Sly は、本劇が制作された当時の社会的変動の一要因である囲い込み（エンクロージャー）の犠牲者に他ならない。つまり Sly は、それまで農民が贍本保有権によって相続してきた、しかも生活の基盤としてきた土地がほんのひとにぎりの領主・大地主によって囲い込まれるという事態によって生まれた放浪者のひとりなのである。“[O]ld / Sly’s son of Burton-heath” (Induc. 2.15-16) と自分の身元を確認する Sly の言葉も、彼が囲い込みという社会的変動の犠牲者であることを証拠立てている。なぜなら当時、囲い込み反対の暴動が頻発した場所が、Burton-heath [Barton-on-the-Heath] や、Shakespeare の故郷 Stratford-upon-Avon が位置する Warwickshire をそのうちに含む Midland counties だったからである (Boose 201)。さらに Boose は、こうした暴動においては、騒擾を起こした者が女装するという形で女性の力が称揚され、利用される一方で、民衆は「じゃじゃ馬」(shrew) に代表される女性たちによって共同体の秩序が乱されることに極度に神経をとがらせていたこと、さらにこうした階級とジェンダーをめぐる不安が近代初期英国において広範に循環していたことを指摘する (203)。

Shr. には、上記のような当時の階級間の摩擦とジェンダーをめぐる不安が投影されているだけでなく、Induction においてもメイン・プロットにおいても、前者の摩擦が、後者の不安とその解消へと「文化的に転移」(“cultural displacement” 206) されていると、Boose は説明する。つまり 鑄掛屋 Sly の、放浪者から領主への変身は、Induction 冒頭において「がみがみ女」(scold) の眷属である Hostess にやり込められていた彼が、小姓 Bartholomew が扮するところの従順で貞淑な妻を受け入れることによって完成するからであり、メイン・プロットにおいて、「金銭に目が無い一介の放浪者」(“a needy wanderer” Boose 224) にすぎない Petruchio が、Padua の裕福な市民階級に属する者の財産を手に入れることができるのは、Katherina を家父長制社会に「馴致すること」(taming) が完了して初めて可能になるからである。

Boose の上記のような分析に従うならば、*Shr.* 結末部において Sly が姿を見せないのには確固たる理由が存在することになる。Sly と Petruchio はタイポロジカル (typological) な関係にあると同時に、前者は後者と一体化しており、その意味で Sly が劇の大団円において再び姿を見せる必要はないからである。

近代初期英国における放浪の概念を批評の座標軸に据え、*Shr.* における Induction とメイン・プロットの照応関係および、階級間の闘争とジェンダーの問題を炙り出していく Boose の分析

の手並は鮮やかである。だがしかし、彼女の論からは排除された、近代初期英国の放浪者の重要な一側面——即興的な変身——を考察の対象に加えるのならば、Sly と Petruchio のタイポロジカルな関係はより鮮明になるのではないだろうか。

III

近代初期英国における放浪者の姿を生き生きと伝える当時のテキストのひとつ——Linda Woodbridge 著 *Vagrancy, Homelessness, and English Renaissance Literature* の言葉を借りるなら「英国放浪文学の基本的テキスト」(“[a] foundational text of English rogue literature” 39) ——である Thomas Harman の *A Caveat for Common Cursitors Vulgarly Called Vagabonds* (1566 年出版) では、“A Counterfeit Crank” と題された章において、「癲癩」(“the falling sickness” 128) の患者を装って人びとの同情を引き、金を巻き上げるベテン師の話が次のように語られている (128-32)。²⁾

1566 年の 11 月 1 日諸聖人の日の朝、ひとりの物乞いが Whitefriars にあった Harman の家を訪れる。その男は哀れっぽく自分が癲癩に罹っていることを告げ、施しを受けようとする。男の姿といえば、ぶかぶかの、継ぎを当てられた革製の古ぼけた胴衣 (jerkin) を着ている以外、腰から上は裸同然。頭には、顔だけ出せるように工夫された、汚らしい布きれを巻きつけ、髭を顎当てでしっかりと押さえつけている。片手で古ぼけたフェルト帽を差し出し、施しの金を無心する。顔に関しては目から下は血だらけで、帽子もズボンも泥だらけという有様。胴衣、帽子、そしてズボンまでも泥だらけになっている理由を尋ねられると、昨夜発作におそわれて一晩中溝の中に仰向けになって倒れていたからと答える。近所の親切な婦人がきれいなリンネルの布を差し出し、水を使って顔を洗わせようとするが、いったん洗うとまた血が流れ出して自分ではどうしようもないからという理由で、男はその申し出を拒む。彼は Leicester の生まれであること、Nicholas Jennings という名であること、発病してから八年がたつが手の施しようがないこと、血縁者も友人も同様の病に罹っていること、London に出てきて二年になること、それに加えて、一年半は病院 Bethlehem (Bedlam) に収容されていたこと、そこの看守の名は John Smith であることを立て続けに語る。

癲癩という言葉聞き Harman は、この浮浪者は病人を騙る香具師ではないかと疑う。Harman は従者を病院 Bethlehem に走らせ、Nicholas Jennings なる患者が収容されていたか、John Smith なる看守がいるかどうかを確かめさせる。はたして Harman が予想していたように、そのような患者も看守もいなかったことが明らかになる。Harman はこの結果に満足することなく、自分の本の印刷を依頼している印刷業者の徒弟奉公人二人を使って Nicholas Jennings の後を追跡させる。奉公人は “Temple bar” (130) の外に位置する居酒屋 Clements Inn の裏の路地で、Nicholas Jennings が豚の膀胱に入れておいた血を顔に塗りつけ、泥を新た

に胴衣、帽子、ズボンに塗りつけているところを目撃する。徒弟奉公人からの連絡を受けた印刷業者が警官に通報し、Nicholas Jenningsはその場に到着した警官に逮捕される。捕縛されたとき、物乞いをして得た Jennings の所持金は 13 シリング 3 ペンスあまりにものぼった。所持金を調べるために彼に変装を解かせたのであるが、みすぼらしい身なりの下から現れたのは、黄褐色の髭を生やした、一点のしみも傷もない真っ白な肌をした見事な体躯の持ち主であった……。

1573 年に重版された *A Caveat or Warening for Common Cursetors Vulgarely Called Vagabones* (Q4) のテキストには、Nicholas Jennings の姿が一枚の木版画に刻まれている。向かって左は、“A Upright man Nicolas Blunt” と説明が加えられた、パリッとした服を着こなしている市民階級に属する男の姿、右は “The Counterfet Cranke, Nicolas Genings” と説明が付された、癲癩患者を装う浮浪者の姿である。前者は左手を杖に添え、後者は右手で帽子をつかんでいるのだが、その杖と帽子は一体となっているように描かれ、二人の男も杖と帽子を軸にして鏡像関係を結んでいる。左手の男が変装前の Nicholas Blunt であり、右手が変装後の Nicholas Jennings であることは言うまでもない。この木版画の下には次のような詩句が添えられている。³⁾

These two pictures lively set out,
One body and soul, God send him more grace:
This monstrous dissembler, a Crank all about.
Uncomely coveting of each to embrace,
Money or wares, as he made his race.
And sometime a mariner, and a serving man:
Or else an artificer, as he would feign then. . . (Fumerton 42)

どうやら Nicholas Jennings 別名 Blunt は、病人を装うだけでなく、水夫、下男、職工といった職種にまでその即興的変身能力を遺憾なく発揮していたようである。

Harman は上掲の書の中で “A drunken Tinker” と名付けた章を設け、酔っぱらった鋳掛屋を “beastly people” (133) と規定し、彼らが常にいかがわしい女性たちを引き連れて商売の片棒を担がせていると告発しているが、Shakespeare が本劇の冒頭で、酩酊した鋳掛屋 Sly を指して “monstrous beast” (Induc. 1.30) と領主に呼ばせただけでなく、Bartholomew の女装あるいは “wanton pictures” (Induc. 1.43) という手段を使って Sly を「無礼講の王」(Lord of Misrule) に祭り上げたのは、Harman の記述が念頭にあったからかもしれない。たとえ Harman の告発が劇作家の与り知らぬ事であったにしても、Jennings のように重層的な変身を十八番とする放浪者のイメージは、Robert Copland の *The Highway to the Spital-House* (1535-36 年) の次の描写にもあるように、当時かなり一般的なものであったようだ。

By day on stilts or stooping on crutches
And so dissimule as false loitering flowches,

With bloody clouts all about their leg,
 And plasters on their skin when they go beg.
 Some counterfeit leproy, and other some
 Put soap in their mouth to make it scum,
 And fall down as Saint Cornelys' evil.
 These deceits they use worse than any devil;
 And when they be in their own company,
 They be as whole as either you or I. (Copland 7)

William C. Carroll は、近代初期英国の放浪者たちが当時の権力者たちにとって脅威となったのは、彼らに備わる境界侵犯の能力の故であったと説明する——

Vagrants were thus considered a physical threat as well as a philosophical one, because their very nature was to cross boundaries, to transgress categories of all kinds. Their actual wandering over the rural roads and urban streets of the kingdom is the external figure of their equally radical slippage between other conceptual and political categories. . . . National and local authorities struggled throughout the period to police such free-floating signifiers. (6)

Carroll が指摘するように、「漂泊する記号」“free-floating signifiers”としての放浪者たちが侵犯するのは物理的な境界だけではない。Nicholas Jennings や、Robert Copland が告発しているような浮浪者たちは、変装の力で自己同一性という枠組みすら楽楽と越えていくのである。ではこのような放浪者に備わる即興的な境界侵犯能力は、*Shr.* においてどのような形で表されているのだろうか。

IV

領主の悪戯によって無礼講の王に仕立て上げられた Sly は自分が携わってきた職業を列挙することによって自己同一性を確認しようとする——

What, would you [Lord] make me mad? Am not I Christopher Sly, old Sly's son of Burton-heath, by birth a pedlar, by education a cardmaker, by transmutation a bear-herd, and now by present profession a tinker? (Induc. 2.15-18)

しかし皮肉なことに、アイデンティティを保持しようとするこうした言葉と身振りそのものが、Sly を自己同定とは無縁の放浪者に位置づけてしまう。1572年6月29日に公布された「浮浪者取締法および救貧法」(An Acte for the punishment of Vacabondes and for Releif of the

Poore and Impotent) では取り締まりの対象となる放浪者は次のように規定されていたからである。

... All and everye persone and persones beyng whole and mightye in Body and able to labour, havinge not Land or Maister, nor using any lawfull Marchaundize Crafte or Mysterye whereby hee or shee might get his or her Lyvinge, and can gyve no reckninge howe he or shee dothe lawfully get his or her Lyvinge; & all Fencers Bearewardes Comon Players in Enterludes & Minstrels, not belonging to any Baron of this Realme or towards any other honorable Personage of greater Degree; all Juglers Pedlars Tynkers and Petye Chapmen; whiche seid Fencers Bearewardes Comon Players in Enterludes Mynstrels Juglers Pedlers Tynkers & Petye Chapmen, shall wander abroad and have not Lycense of two Justices of the Peace at the leaste, whereof one to be of the Quorum, when and in what Shier they shall happen to wander...shalbee taken adjudged and deemed Roges Vacaboundes and Sturdy Beggars. (Chambers 270)

“Juglers”から“Comon Players”にいたるさまざまな職種に属する人びとを包括的に取り締まろうとする上記の法令からは、「漂泊する記号」としての浮浪者をなんとかして社会に係留しようとする権力者たちの苦渋の表情すら読みとることすらできそうである。そしてこの法令によれば、“pedlar”、“bear-herd”、“tinker”と職を転転とする Sly は、彼の抗弁——“Slys are no rogues” (Induc. 1. 3)——にもかかわらず、紛れもなく放浪者のカテゴリーに属しているのである。

Lynda E. Boose は、Sly が従事していた“cardmaker”——羊毛を梳くための梳き櫛製造者——の職が、Barton-on-the-Heath が位置する Cotswolds 一帯で起こった、食物暴動の引き金となる民衆蜂起を扇動した労働者グループと関連のあることを指摘しているが (209)、本劇の Induction においては「放浪者」Sly を領主に祭り上げることで、暴動と結びつきかねない要素があらかじめ用意周到に排除されている。そしてそのような排除のプロセスと同時に展開されるのが、他ならぬ、メイン・プロットの主題でもある女性支配のプロセスなのである——

Sly. Are you my wife, and will not call me 'husband'?

My men should call me 'lord'; I am your goodman.

BARTHOLOMEW. My husband and my lord, my lord and husband,

I am your wife in all obedience. (Induc. 2.100-03)

Harman の告発本に登場した Nicholas Jennings が即興的な変装を繰り返していたことと、Sly が行商人、梳き櫛製造者、熊使い、鋳掛屋といった職を転転としていたことは明らかに共鳴し合っている。しかし Jennings とは違って、Sly はこの Induction において、他者の力に促されるよ

うにして領主への変身を成し遂げているのである。

メイン・プロットの Petruchio は結婚式当日に、浮浪者のような出で立ちで Katherina の前に姿を現す。

BIONDELLO. Why, Petruchio is coming in a new hat and an old jerkin;
a pair of old breeches thrice turned; a pair of boots that have been
candle-cases, one buckled, another laced; an old rusty sword tane
out of the town armoury, with a broken hilt and chapeless; with
two broken points; his horse hipped—with an old mothy saddle
and stirrups of no kindred—besides, possessed with the glanders
and like to mose in the chine; troubled with the lampass, infected
with the fashions, full of windgalls, sped with spavins, rayed with
the yellows, past cure of the fives, stark spoiled with the staggers,
begnawn with the bots, swayed in the back and shoulder-shotten,
near-legged before, and with a half-cheeked bit and a headstall of
sheep's leather, which, being restrained to keep him from stumbling,
hath been often burst and now repaired with knots; one girth six
times pieced, and a woman's crupper of velour, which hath two
letters for her name fairly set down in studs, and here and there
pieced with packthread. (3.2.41-56)

教会での結婚式において無軌道な振る舞いをした Petruchio について、Gremio は身分の低い者を意味する “groom” (142) という蔑称を使って表現しているが、まさしくこの場で Petruchio は、居酒屋で狼藉を働いた放浪者 Sly を模倣するような出で立ちや身振りで登場しているのである。さらに Petruchio が次のように宣言するとき、Bartholomew 扮する従順な妻を侍らせて悦にいる Sly の身振りさえ、彼は真似ていると言えよう。

I will be master of what is mine own.
She [Katherina] is my goods, my chattels; she is my house,
My household-stuff, my field, my barn,
My horse, my ox, my ass, my anything,
And here she stands. (3.2.218-22)

では放浪者に備わる即興の変身の技巧を自家薬籠中のものとしているのは、Petruchio だけだろうか。否、Katherina も「じゃじゃ馬馴らし」の過程を通じてその技巧を学んでいくのである。

Patricia Fumerton はその著 *Unsettled: The Culture of Mobility and the Working Poor in Early Modern England* において、A. L. Beier と Roger Finlay の「近代初期ロンドンではほとんど誰も彼も移住者であり、彼らには家族同士の絆や帰属観念が欠けていた」という指摘を踏

まえながら (12)、当時の放浪が単に身体的な移動を意味していたのではなく、共同体の中にあっても根無し草的な生活を送っている人びとの不安をも包括する概念であったことを明らかにしている——

Though residing in their parents' or in their own independent lodgings, then, "at-home" youths, especially women such as Bensley's daughter—even when engaged in labor—were vulnerable to being labeled "vagrants" and to prosecution by officials as if they were just such idle tramps. . . .

What I suggest is that, even without becoming physically displaced, members of the huge body of servants and apprentices, both male and female, in London and in other urban centers could very well have experienced conditions of unsettledness within their designated social, economic, and physical positions. In the most basic sense, such youths would have shared the sense of estrangement associated with London life that we have also identified with the physically unsettled poor. (Fumerton 16-17)

“Bensley's daughter”とはNorwich在住の未亡人Bensleyの娘。彼女は母親と同居はしているが、親方と徒弟奉公の契約も結ばず、結婚もしていない。家で内職をしているにもかかわらず、放浪者と同様に「仕事に従事せず」(“out of service”)というレッテルを貼られ、1628年から1634年にかけてNorwich市当局と幾度も悶着を起こした人物である(Fumerton 16)。

確かに*Shr.*のKatherinaは、Fumertonがデラシネ的存在として挙げる“Bensley's daughter”やその他の若者たちとは違って、下層階級にも属していないし、家内で内職に従事することもない。だが、“shrew”や“scolding tongue”(1.2.96)の持ち主として常に/既に有徴化されてきたKatherinaが次の台詞を口にするとき、彼女もまた“Bensley's daughter”たちと同じく、近代初期の家庭あるいは共同体の中で居場所を失った「漂泊する記号」としての若者のひとりであったことに我々は気づかされるのである。

What, will you [Baptista] not suffer me? Nay, now I see
She [Bianca] is your treasure, she must have a husband.
I must dance barefoot on her wedding day
And, for your love to her, lead apes in hell.
Talk not to me! I will go sit and weep
Till I can find occasion of revenge. (2.1.31-36)

したがって、結婚式当日にKatherinaの前で披露される花婿Petruccioの浮浪者風の出で立ち、Slyを境位を真似る彼の身振りを表すと同時に、Katherinaがこれまで置かれてきた寄り添なさを鏡のように映し出してもいると言えるのである。

ただし Katherina は、独身者として痛感してきた居場所のなさや居心地の悪さをここで改めて認識させられるだけではない。披露宴の席から拉致され Petruchio のカントリー・ハウスに向かう道中で、泥だらけの Nicholas Jennings を連想させるような形で、彼女もまた放浪者の姿に身をやつさなくてはならない――

GRUMIO. But hadst thou [Curtis] not crossed me, thou
shouldst have heard how her [Katherina's] horse fell, and she under her
horse;
thou shouldst have heard in how miry a place, how she was
bemoiled, how he [Petruchio] left her with the horse upon her, how he beat
me because her horse stumbled, how she waded through the dirt
to pluck him off me, how he swore, how she prayed that never
prayed before, how I cried, how the horses ran away, how her bridle
was burst. . . . (4.1.53-60)

では、家庭における安定を指向・祈念するはずの結婚の儀礼において、なぜ Petruchio も Katherina も放浪者のイメージを身に纏わねばならないのであろうか。その答えは、Sly や Nicholas Jennings に代表される近代初期英国の放浪者たちが共有していた即興的な変身の技量を Petruchio も備えていること、そして「じゃじゃ馬馴らし」の教程にこの変身術を Katherina に教授することが含まれていたことに求められよう。

PETRUCHIO. [*To Vincentio*] Good morrow, gentle mistress, where away?
Tell me, sweet Kate, and tell me truly too,
Hast thou beheld a fresher gentlewoman?
.....

KATHERINA. Young budding virgin, fair and fresh and sweet,
Whither away, or where is thy abode?
.....

PETRUCHIO. Why, how now, Kate! I hope thou art not mad.

This is a man—old, wrinkled, faded, withered—. . . (4.5.27-29, 36-37, 42-43)
Petruchio のキューにしたがって、老人 Vincentio を乙女へ、さらには “a reverend father” (48) へと転身させる Katherina。その老人の転身に寄り添うようにして、彼女自身も Petruchio が成形したいと望む理想の女性への変身を積極的に演じる。近代初期英国の放浪者たちと不可分の関係にある当意即妙の変身術は、間違いなく Sly から Petruchio へ、そして Petruchio から Katherina へと伝授されているのである。

Petruchio の浮浪者への変身にしても、従順なる妻を演じる Katherina のパフォーマンスにしても演劇がらみであること、そもそも本劇のメイン・プロットが旅回りの役者によって Sly

の前で演じられる劇中劇であることに注意したい。

Sound trumpets.

LORD. Sirrah, go see what trumpet 'tis that sounds.

[*Exit Servingman*]

Belike some noble gentleman that means,

Travelling some journey, to repose him here.

Enter Servingman.

How now? Who is it?

SERVINGMAN. An't please your honour, players

That offer service to your lordship. (Induc. 1.70-74)

上に引用した 1572 年公布の浮浪者取締法において、鋤掛屋も、許可証を持たない旅回りの役者も同じ放浪者に分類されていたことを想起するならば、Sly も彼の前で「愉快な芝居」(“a pleasant comedy” Induc. 2.125) を演じる役者も——彼らが許可書を携えていないと仮定すると——市当局の取り締まりの対象となる「漂泊する記号」という点では同類だったのである。Shakespeare がわざわざ Induction に旅役者を登場させ、その変身術を発揮させるのは、Sly の領主への転身を補完するため、さらには旅役者＝放浪者に備わる変身能力を Petruchio と Katherina に転移させるためであったようだ。

Shakespeare 劇の中で、放浪者としての旅役者と、劇中を漂泊する主人公とを強い親和力で結ばせているのは、*Shr.* だけではない。*Hamlet* においても市中の “the common stages” (*Ham.* 2.2.340) を追われ、旅役者に身を落とした役者たちが Hamlet と強い精神的絆で結ばれる。

HAMLET. Is it not monstrous that this player here,

But in a fiction, in a dream of passion,

Could force his soul so to his own conceit

That from her working all his visage wann'd,

Tears in his eyes, distraction in his aspect,

A broken voice, and his whole function suiting

With forms to his conceit? (2.2.545-51)

Hamlet には、「怠け癖」(“[a] truant disposition” 1.2.169) に導かれて Elsinore に戻ってくる Horatio、夜の闇を縫ってさまようことを運命づけられた Ghost を始めとして、「王の行幸とは浮浪者の腹中を通過していくこと」(“a king may go a / progress through the guts of a beggar” 4.3.30-31) と語られるほど、放浪のイメージが深く浸透している。そしてとりわけ Hamlet は、Fumerton の説明にあったような、当時のロンドンにあふれていた根無し草的な召使いや徒弟奉公人たちを代表するかのよう、宮廷内で居場所を失った存在として描かれている。

彼が、街を追われて旅を続ける役者たちに心を通わせ、上に引用した台詞で述べられているように、彼らの変身の技量を高く評価するのも無理からぬことなのである。

V

HORTENSIO. And tell me now, sweet friend, what happy gale

Blows you to Padua here from old Verona?

PETRUCHIO. Such wind as scatters young men through the world

To seek their fortunes farther than at home

Where small experience grows. (1.2.45-49)

彷徨する若者として登場し、劇中では「放浪者」＝「心変わりしやすい人物」(“a movable” 2.1.193)⁴³と呼ばれる Petruchio は、自己のイメージを成形するために、そして Katherina を家父長制社会に馴致するために放浪のダイナミズムを最大限に活用する。Katherina も馴致されていく過程で、そのダイナミズムを自家菜籠中の物として自己の内に積極的に取り込んでいく。

「じゃじゃ馬馴らし」の過程を間近で観察していた Hortensio はこう語る――

Well, Petruchio, this has put me in heart!

Have to my widow, and if she be froward,

Then hast thou taught Hortensio to be untoward. (4.5.77-79)

Hortensio は女性を支配する術を Petruchio に学び、劇中劇において旅回りの役者たちがその役を演じる Petruchio と Katherina は、同じく放浪者である鑄掛屋 Sly と目配せを交わしながら、彼から放浪のダイナミックスを学びとる。その意味で、近代初期英国の社会的変動の犠牲者であると同時に――Thomas Nashe の放浪者を描いた本のタイトルを借りるなら――「不幸な旅人」(the unfortunate traveller) でもある Sly は、もはや *Shr.* の結末部に再び姿を現す必要はないと言えよう。なぜならば、今や彼の分身とも言える Petruchio と Katherina が手に手を取って大団円の舞台に立っているからである。

注

* 本稿は2005年3月9日に行った名古屋大学文学研究科プレゼンテーション「近代初期英国における放浪の詩学とシェイクスピア」の原稿を、平成18年度科学研究費補助金(基盤研究[C] 課題番号18520190)による「近代初期英国における放浪文学と社会的変動との関連性についての研究」の成果に照らして、加筆・修正したものである。

- 1) *The Taming of the Shrew* の引用および行数は、The New Cambridge Shakespeare の版に拠っている。
- 2) Harman による Nicholas Jennings の描写に関しては、Agnew 65-66、Carroll 71-89、Fumerton 33-43、Pugliatti 141-47、Salgado, *Elizabethan Underworld* 127-29 を参照。
- 3) Jennings を描いた木版画については、Fumerton, Fig. 3 を参照。1573年のQ4版以外の版に添えられた Jennings の木版画については Salgado, *Cony-Catchers* 110、*Elizabethan Underworld* 130 を参照。
- 4) 二幕一場193行目の“a movable”には、「移動可能な家財」の意味も掛けられている (Thompson 87)。

引用文献

- Agnew, Jean-Christophe. *Worlds Apart: The Market and the Theater in Anglo-American Thought, 1550-1750*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Beier, A. L. *Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*. London: Methuen, 1985.
- Boose, Lynda E. “*The Taming of the Shrew, Good Husbandry, and Enclosure*.” *Shakespeare Reread: The Texts in New Contexts*. Ed. Russ McDonald. Ithaca: Cornell UP, 1994. 193-225.
- Carroll, William C. *Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. Vol. 4. Oxford: Clarendon, 1923.
- Copland, Robert. *The Highway to the Spital-House. The Elizabethan Underworld: A Collection of Tudor and Early Stuart Tracts and Ballads*. Ed. A.V. Judges. 1930. *Key Writings on Subcultures 1535-1727: Classics from the Underworld*. Vol. 1. London: Routledge, 2002. 1-25.
- Fumerton, Patricia. *Unsettled: The Culture of Mobility and the Working Poor in Early Modern England*. Chicago: U of Chicago P, 2006.
- Harman, Thomas. *A Caveat for Common Cursitors Vulgarly Called Vagabonds*. 1566. *Rogues, Vagabonds, and Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature Exposing the Lives, Times, and Cozening Tricks of the Elizabethan Underworld*. Ed. Arthur F. Kinney. Amherst: U of Massachusetts P, 1990. 103-53.
- Kyd, Thomas. *The Spanish Tragedy*. Ed. Philip Edwards. The Revels Plays. 1959. Manchester: Manchester UP, 1977.
- Nashe, Thomas. *The Unfortunate Traveller. The Unfortunate Traveller and Other Works*. Ed. J. B. Steane. Harmondsworth: Penguin, 1972. 251-370.
- Pugliatti, Paola. *Beggary and Theatre in Early Modern England*. Hants: Ashgate, 2003.
- Salgado, Gámini, ed. *Cony-Catchers and Bawdy Baskets: An Anthology of Elizabethan Low Life*. Harmondsworth: Penguin, 1972.
- . *The Elizabethan Underworld*. London: Dent, 1977.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Ed. Harold Jenkins. The Arden Shakespeare. London: Methuen, 1982.
- . *The Taming of the Shrew*. Ed. Ann Thompson. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- The Taming of a Shrew. Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Ed. Geoffrey Bullough.

Vol. 1. London: Routledge, 1961. 55-108.

Thompson, Ann, ed. *The Taming of the Shrew*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.

Woodbridge, Linda. *Vagrancy, Homelessness, and English Renaissance Literature*. Urbana: U of Illinois P, 2001.

Synopsis

The Disappearance of Christopher Sly:
The Taming of the Shrew and the Vagrancy in Early Modern England

By Mutsumu Takikawa

Why does Christopher Sly disappear in the denouement of *The Taming of the Shrew*? The Induction in which Sly makes his appearance seems, as Lynda E. Boose suggests, to be “the broken part of an enclosing frame from which the original conclusion” is missing. The aim of this paper is to unravel the mystery of Christopher Sly, focusing upon the idea of vagrancy in early modern England.

According to the Act for the punishment of vagrants promulgated in 1572, Sly the tinker and the itinerant players who perform “a pleasant comedy” (Induc. 2.125) could be classified as vagrants. Interestingly, however, they are temporarily deprived of their itinerancy in a play within a play: while Sly is set on a pedestal as the Lord of Misrule, the players are granted temporal licence to perform in the presence of the Lord. Instead, the vagrancy represented by these vagabonds is displaced to Petruchio and Katherina.

When Petruchio, dressed as a vagrant, arrives at the wedding, he may represent Katherina’s unsettledness, which was also the hallmark of youths in early modern England, within her family and the society. Furthermore, she has to undergo the ordeal of vagrants on the way to Petruchio’s country house. Wrapped into vagrancy, they can gain a perfect command of the improvisatorial performance, which is the principal feature of vagrants depicted in Thomas Harman’s *A Caveat for Common Cursitors Vulgarly Called Vagabonds* (1566).

One can safely state that Sly as a vagrant has an typological influence upon Petruchio and Katherina, and that the couple, by learning the dynamics of vagrancy, make themselves the master of impromptu acting through the taming process. We can conclude that Sly must be metamorphosed into the protagonists in this play.